

# Essay

## In My Life

# common、social、public

## ～人の集まりと繋がり～

シンキング・バース

日本語研究班

### 日本語で どう切り分けるのか

# ボ

クたちが頭を悩ませている課題の一つに、common、social、public の日本語での切り分け、があります。それぞれの単語は、日本語訳で「共通の」「社会的な」「公共の」とするのが一般的です。でも、これらの訳語は、イメージ格差が大きいとボクたちは考えているからです。

各単語は、抽象性の強い概念用語という性格を持っています。原語自体、その明確な切り分けがあるとは言えません。重複領域があるため、ある事柄を指す時の単語選択に戸惑う用語と言えます。

#### ●common と social

# イ

インターネットの普及以来、有力なドメインの一つになっている「.com (ドットコム)」は、common 系列の用法です。「共有」サイトを表す記号と言え、「みんなの」と言い換え可能かもしれません。

同じインターネット関連用語の一つに、social media があります。日本語訳は今のところなく、「ソーシャル・メディア」と表記されます。直訳すれば「社会的媒体」になります。主にSNS (Social Networking Service) を指して使われています。

このインターネット関連用語として同居する common と social のちがいを、ボクたちは、ほとんど理解できません。それは、かつて世界を二分する勢力になっていた「共産主義 (communism)」と「社会主義 (socialism)」のちがいを、ほとんど理解できないのと似ています。



#### ●「共有」と common

# 英

語側の問題として、common と social は、重なり合う部分を含みながらも、やはりちがいます。common は、等質性が高い集団を指すのに対して、social は、個別の異質さを認め合いながら生きている集団を指す、と理解しています。日本語として考えれば、common は「村的」なのに対して、social は「都市的」と言えるかもしれません。

近年、「コミュニティー (community)」ということばを見聞きする機会が増えました。かつては「共同体」という訳語が当てられました。ボクたちは使わなくなりました。日本では、農村などでその崩壊が進んでいるとして、「コミュニティーの再生」が、一つの政策課題になっています。

「コミュニティー」は、common の原義に照らすと、個々人への意識が social ほど高くはありません。「ベタ塗りの人集団」のようなイメージがあり、血縁や地縁のような「共有」の価値があることが、前提にあ

ります。「共有」するものが、田畑であれ、データであれ、「私有」への意識が薄い人集団が「コミュニティー」です。

「共有」する価値を前提とした単語には、「コミュニケーション (communication)」や「コミット (commit)」などがあります。「コミュニケーション」は「共有言語」、「コミット」は「共有概念」を前提としていると言えます。

その原型になる common を、日本語で表す時、「共通の」「共有の」「みんなの」は、妥当性があるとボクたちは考えています。ただし、次に述べる social や public との切り分けを、どうするかには課題があります。

### ●social が表す人と人の繋がり



と人の繋がりを表すことばとしての social は、明治初期の翻訳時点から、悩みの種だったことで知られています。現在は「社会的な」が普及していますが、「繋がり」のニュアンスを伝えられないのが、大きな問題点でした。

social の系列語に当たる society は、人と人の繋がりの総和を表すことばです。都市で暮らす一人ひとりが、経済的な繋がりや競争、対立を含みながらも、いっしょの空間にいる。その全体が society です。「都市 (city)」は、その類語に当たります。

個々の繋がりを表すネットワーク・ラインに力点を置いている social は、例えば全体の中の階層 (class) や、ライバルだが仲間でもある業界団体のような、複相した関係を表すのに適しています。common は個々が見えにくいのに対し、social は個々の関係が見えやすいのです。

ところが、日本語の「社会」は、まるで community の訳語のように、個々がベタ塗り状態のイメージを与えてしまいます。言

語による概念の切り分けが、日本語ではできていないと言えます。

この弱点を克服するためには、social の訳語に、形容詞用法として「社会的繋がりを持っている」のような書き込みが必要になります。必然的に society は、「社会的繋がりを持つ集団」のようになります。

しかし、学術書を書くならまだしも、日常的にその方法を使うことには、無理があります。また、「社会」の意味に説明したニュアンスを込めるにしても、すでに定着している意味作用を変えることになり、ここにも無理があります。

ボクたちは、social の訳語として、西周が当初そうしたように、「人間」が相応しいのではないかと考えることがあります。「人間」は、「世間」に近い意味で使われた用語で、人と人の関係性を表しています。「世間」が「世の中」をイメージさせるのに対して、「人間」は、「人間関係」を表すことができるのです。

しかし、「人間」もまた、「人間=人」のイメージが定着しています。ボクたちは、「人間」という表現を避けて「人」としているため、「人間」は宙に浮いた用語になっていますが、世間一般ではまだ、「人間=人」です。ボクたちが social の日本語表記に頭を痛めるのは、そういう背景のためです。

### ●public に「公」を当てる問題点



クたちが、切り分けを必要としていると考えるもう一つの単語が public です。public は、前述のように「公共の」と訳するのが一般的です。適正な訳語のように思われがちですが、一步立ち止まって考えると、「公共」は、問題がある表現と言わざるを得ないのです。

ボクたち日本人が「公共」という日本語

に触れるのは、「公共の福祉」「公共事業」「公共交通機関」など、極めて限定的です。めったに使わない用語の一つと言って、過言ではありません。

それに対して、英語における **public** の使用頻度は、格段に高いと言えます。日常用語と言って良く、日本語の「公共」のように、官公庁用語扱いではないことが、決定的なちがいです。

**public** の本来の意味は、**publish** に「出版する」という意味があるように、「多くの人々の(に)」というニュアンスが強いことばです。「公然と」「開けっぴろげに」と訳しても良いかもしれませんが。官公庁を「公(おおやけ)」としたニュアンスではなく、人々を「公」としている用語です。

その人々を「公」としている **public** は、かつては「大衆」という用語に象徴されるように、「衆」の文字を当てる習慣が、日本語にはありました。「衆議院」は、その慣行の名残りと言えます(ボクたちは、「上院」「下院」で良いと思います)。

しかし、「衆」には、差別的なニュアンスが薄っすらと潜んでいます。「民衆」「公衆」「聴衆」のような表現は、できる限り避けたいため、ボクたちは、「衆」に変わる表現として、「人々」「人たち」を使うようにしています。

一方、「公」と言えば、「公爵」「公使」のように、爵位や要人を表す文字として使われて来ました。「衆」とは逆に、身分の高さなどを表す語で、「公家」「公方」などの使用例がありました。ある意味では、その伝統が「公共」にはあるのです。

**public** の本来の意味は、けして貴族的な「公」ではありません。全く逆で、市民的な人々の集まりなどを指していると言えます。パブ(**pub**)は、まさに市民的な人々が集まる場所です。

ボクたちが、**common**、**social** と並んで **public** を重要な用語と考える理由は、市民的な人々の集まりとしての「公」が、地域のモラルやマナーを考える上で、欠かすことができない要素と考えるからです。官公庁を「公」としている限り、**public** は、どこまで行っても公務限定です。公務は **public** の一部にすぎないことは、誰が考えても明らかです。それを是正した **public** の日本語訳が必要なのです。

ボクたちは、**public** に近い日本語として「市民的な」を考えています。「**public welfare** (公共の福祉)」は、「市民への福祉」への置き換えが可能です。「**government investment** (公共事業)」は、「政府投資」または「官公庁投資」とすることができます。**public comment** は、「市民の意見」で通用するはずです。

しかし、「市民的な」とすることにも課題はあります。「市民」と言っても、それは多様な人たちの集まりで、ベタ塗り状態の人々の集まりではないからです。日本では「市民権」という規定がないため、市民として最低限守るべきルールやマナー(いわゆる「公共」)が明確ではないのです。その課題を克服して **public** に相当する日本語を編み出すことは、かなりの困難を伴っています。

### ●必要となる使用基準



本語で人々の集まりについて語ることは、一人ひとりの人と多数の人の狭間に立って、ことばを編むことです。いわゆる

「社会」に目を向けるには、そこで使う用語への配慮が不可欠です。ボクたちは、その使用用語を断定的に切り分けるつもりはありませんが、ボクたちなりの使用基準は、徐々に作って行きたいと考えています。

(2018年8月4日)

**シンキング・バース新書**

ボクとワタシの日本語診断  
common、social、public

2018年8月4日（初版）発行

著者：シンキング・バース  
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。